横田教授の「コロナ」チェック　全道的に減少傾向　国産飲み薬の効果期待

2022 年 11 月 29 日北海道新聞

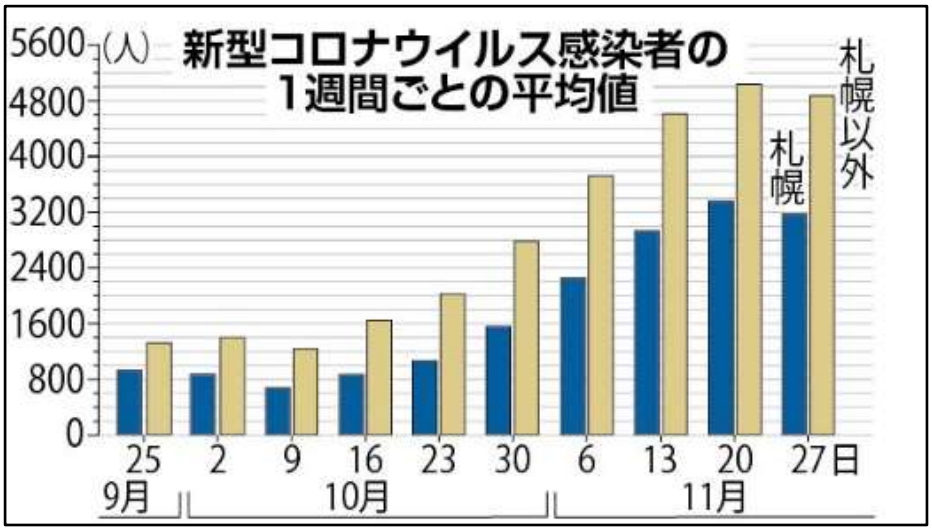
横田伸一（よこた・しんいち）１９６２年、東京都出身。札幌北高、北大理学部化学科卒。北大大学院理学研究科を修了後、住友化学工業生命工学研究所、住友製薬など民間勤務を経て、２０００年、札幌医大医学部微生物学講座の講師に着任。１３年から同講座教授。専門は微生物学、ウイルス学。

道の直近１週間（１１月２１日～１１月２７日）の新型コロナウイルスの感染状況は、札幌、札幌以外ともに減少に転じました。感染者１人が何人に感染させるかを示す「実効再生産数」も感染拡大の分岐点の「１」を下回り、減少局面に入った可能性があります。２２日にはウイルスの増殖を抑える国産初の飲み薬が緊急承認されました。症状緩和への効果に期待しています。

新規感染者数の週平均は、札幌が前週比５・４％減の３１８３・１人、札幌以外が同３・３％減の４８８３・７人。いずれも約１カ月半ぶりに微減となりました。実効再生産数は前週比で札幌が１・０４から０・９８に、札幌以外が１・０２から０・９９に下がりました。

ただ、このまま順調に減り続けるかは不透明です。気になるのがオミクロン株の新たな派生型です。今月中旬に札幌で「ＢＱ・１・１」の感染者が道内で初めて確認されました。道内はまだ２例のみですが、東京都では徐々に感染者に占める割合が増えています。

ＢＱ・１・１は、免疫回避の能力が高いとされています。今後道内でも置き換わりが進む可能性があり、感染者が再び増加に転じることもあり得ます。

緊急承認された塩野義製薬の飲み薬「ゾコーバ」は、オミクロン株に特徴的なせきや発熱などの症状を約１日早く改善できるとされています。現在、有症状者の自宅療養期間は７日間。飲み薬により短縮できれば、介護施設や医療機関での感染によるスタッフ不足が緩和されるのではないかと期待しています。

この冬は季節性インフルエンザとの同時流行が懸念されています。コロナ流行前であれば１１月下旬からインフルの感染者が少しずつ増え始めますが、今季は道内ではまだほとんど報告されていません。しかし時期がずれて流行する可能性もあり、安心はできません。両感染症を防ぐには、マスク着用や手指消毒、の換気が有効です。今後も対策を続けていきましょう。（聞き手・高木緑）